（研究ノート）

# 幕末期日蓮伝記本に関する一考察

## ――中村経年著『日蓮上人一代図会』における弟子・信徒・寺院に関わる記載事項を中心に――

望月真澄

### はじめに

近世以前の作といわれる日蓮伝記本は、刊本・自筆本・写本といった諸本が管見されるが、近世中後期には出版技術の発達もあって、木版刷りで大量に作成された伝記本も多い。日蓮聖人伝の刊行は慶長六年（一六〇一）の『日蓮聖人註画讃』から慶応三年（一八六七）の『日蓮大士真実伝』にいたる二七〇年の間に四〇点を数えるとされている。[1] ここでは、祖師信仰の高揚してくる時期であり、[2] 近代への移行期である幕末期に焦点を絞り、刊本による伝記本作成の時代背景や作者の刊行意図について考察を試みるものである。

幕末期の代表的な刊本の日蓮伝記本として、次の三点があげられる。

1　深見要言著『本化高祖紀年録』　寛政五年（一七九三）初版刊行

2　中村経年著『日蓮上人一代図会』安政五年（一八五八）初版刊行

3　小川泰堂著『日蓮大士真実伝』の三つがある。慶応三年（一八六七）初版刊行

本稿では、検討素材として中村経年著『日蓮上人一代図会』を取り上げることにするが、その挿絵・日蓮の足跡に関しては、既に検討した。[3] ここでは、日蓮の奇瑞に関する事項に注目し、新たなタッチで画かれた挿絵や文章が読者の購読意欲を誘っている様子を検討した。そこで本稿では、日蓮伝記に記された弟子、信徒、寺院に限って取り上げ、他の日蓮伝記本との比較対象とする基礎的作業としたい。

## ○　本書の事項における特長

従来の日蓮伝と比較して記載内容が異なったものに注目するため、新出・異説等を主に抽出することとした。また、過去の伝記に記されているが、日時・内容等、問題となる項目も記すことにしたい。そこで、日蓮と弟子・信徒・寺院、一般の日蓮伝といった項目に内容を分類し、列記してみた。[4]

（引用書の略称）

『註画讃』→『日蓮聖人註画讃』（和文体）

『紀念録』→『本化高祖紀念録』

『仏祖統紀』→『本化別頭仏祖統紀』

※→の箇所は、本書解説部分の内容である。

## 1　日蓮と弟子に関わる事項

8　天台僧成辨法師、高祖の徒弟たらんことを請う。（建長六年）

16の2　高祖、下総鼻輪に行き、真言寺に宿し、寺主、宗を改める（日正）。（文永二年）
　↓下総鼻輪から景綱の姉のことまで『紀年録』にみえて『仏祖統紀』には見えず。

16の2　日澄、衣を替え宗を改める（日澄寺）。（文永二年）

16の2　↓実信の子祝髪する（日向）。（文永二年）

17　古河日胤、首題坊日唱、得度する。（文永五年）

24　天台僧最蓮坊、佐州に渡り、二月一日高祖の謫居を訪れる。（文永九年）

24の2　最蓮坊、高祖が居を謁す。（文永九年二月一日）

25　清澄の義浄房に書を送る。（文永十年五月二十八日）

25　最蓮に当体義を著す。（文永十年）（『紀年録』）

25　日向・日興・佐州に下向す。（文永九年）（註画讃）

31の2　南部に至り、寺主大輪改宗して日蔚という。（建治元年）（『紀年録』）

32　最蓮坊が日蓮の教化によって弟子となる。身延に至って奉侍する（下山本国寺）。（文永九年春頃）

32　平氏忠晴次子亀王麻呂、出家して日輪という（比企三代）。（建治元年）

32の2　山梨郡胎蔵寺主日法、日蓮の弟子となる。（建治二年）

32の2　立正寺二代日乗、宗を改め名を賜る。（建治二年）

32の2　岡宮（光長寺）空存、日蓮の弟子となる。（建治二年）
32の2　清澄寺道善坊遷化する。（建治二年三月十六日）
32の2　最蓮坊日栄に立正観書を与える。（建治三年）
33　鎌倉桑ケ谷龍象房の説法を三位日心（後の身延久遠寺三世日進）が聴聞する。（建治三年）
33の2　下総平賀郷鼻和の地蔵堂を曽谷法蓮が法華堂と改め、日朗を開山とする（本土寺）。（建治三年）
33の2　遠光寺宗明が日宗、戸田長遠寺大心が日心に改め、日蓮の弟子となる。（建治三年）
34　駿州岩本実相寺の学頭智海、天台宗を捨てて高祖の弟子となり、日源と改名する。（弘安元年）
34　上総国墨田次郎時忠、二男時光を出家させる（日秀）（墨田村妙福寺）。（弘安二年）
34の2　泉州江川太郎左衛門利久、豆州韮山に遷り、日蓮の弟子となる（本立寺）。（弘安二年）
35　相股村史正左衛門妻薩華が出家し、日仏となる（下の坊）。（弘安三年正月五日）
35の2　墨田次郎時忠の孫・時宣が来て出家する（新曽妙顕寺二代日徳）。（弘安三年）
36　日弁弟出家し、日忍と名乗る（相橋長福寺・今井妙福寺開山）。（弘安四年）
36　日忍姉の天目、鎌倉畠中の圓成寺、野州佐野妙顕寺の開山となる。（弘安四年）
38の2　日法・日弁・日秀などの教化により田中・大野・熱原・山瀬・賀島の人々法華宗となる。（弘安四年）（流布の高祖一代記）
39　日法彫刻を善す。（弘安五年）
39　日法、師の像を三躯作り、身延・長興・長栄三山に納める。（弘安五年）

39　日法、中老僧の一人に数えられ、休息立正寺の開山となる。（弘安五年）

【人物】成辨（弟子）、日澄（改宗）、日向（祝髪・佐渡下向）、古河日胤・首題坊日唱（得度）、最蓮坊（佐渡行・弟子・当体義抄述作）、清澄義浄坊（書状送信）、南部寺主（改宗・日寿）、平氏忠晴次子亀王麻呂（出家・日輪）、山梨郡胎蔵寺主日法（弟子）、立正寺二代日乗（改宗・改名）、岡宮光長寺空存（弟子）、清澄道善坊（遷化）、最蓮坊日栄（立正観書送る）、三位公日進（鎌倉龍象坊説法聴聞）、遠光寺宗明（弟子・日宗）、戸田長遠寺大心（弟子・日心）、実相寺学頭智海（弟子）、墨田時忠次男時光（出家・日秀）、泉州江川太郎左衛門利久（弟子）、相股村史正左衛門妻薩華（出家・日仏）、墨田次郎時忠孫時宣（出家・新曽妙顕寺二代日徳）、日法・日弁・日秀（教化）、日法（彫刻）、日法（師の像を彫刻、身延・長興・長栄）、日法（中老僧・休息立正寺開山）

【寺院】下総真言寺、下山本国寺、韮山本立寺、岡宮光長寺、新曽妙顕寺、休息立正寺、岩本実相寺、墨田妙福寺、戸田長遠寺

これらの事項は、近世以前の日蓮伝記本には登場しないものが多い。その多くは日蓮が足いた地域において、日蓮との関わりのなかで、伝説として伝えられたものである。特に、教化されて日蓮の弟子となったという内容が多いのが注目される。

### 2　日蓮と信徒（布教活動）に関わる事項

5　川越・駿州富士郡に父重連の旧友あり。（建長二年）

5　川越に住む夫婦を教化する。（建長三年）

8　工藤吉隆、四条金吾、進士義春、印東氏、檀越となる。（建長五年）
↓四条金吾、進士義春、工藤吉隆檀越となりし事は康元元年、高祖三十五歳の時とする（『紀年録』）
8　富木胤継、舟上にて教化をうける。（建長六年）
9　工藤吉隆、荏原義宗、池上宗仲、四条金吾頼基、進士太郎義晴、本化戴髪の弟子と称す。（建長七年）
9　南無谷における奇瑞によって泉沢氏とその子三人が帰依する（持呪法華塚）。（正嘉二年）
↓法華塚の泉沢氏三人、妙法に帰したこと見えず（『仏祖統紀』）。
14　『四恩抄』を房州天津城主工藤左近丞に与える。（弘長二年）
14　船守弥三郎、伊東朝高が帰依する。（弘長三年）
16の2　工藤吉隆（日隆）、一宇を建立する（鏡忍寺）。（文永二年）
16の2　帰路、藤原にて庄屋次郎助が檀越となる。（文永二年）
16の2　宇都宮君島某に行き、その祖母が帰依して妙金と号す。城主下野守景綱の姉も帰依して妙正と号す。（文永二年）
16の2　明部少輔行光の妻、唱題の功徳を問うので『法華題目抄』を書し、彼妻へ与える。（文永三年）
↓下総星名五郎に書を送る。（文永四年二月五日）
16の2　安房を出て鎌倉へ帰る途中、下総中山の富木五郎の館に立ち寄り、越年する。（文永四年）
17　常忍邸に在して近郷を教化する。斉藤兼綱も宗を改めて受戒する。（文永五年）
19の1　大曼荼羅を書し、塩屋氏に与える。（文永六年）

19の1　木立村を過ぎ、本尊を乞う者二十八人に書して与える。（文永六年）
23　新曽の領主黒田時光妻、難産に苦しむところ、高祖祈念すると平産する。（文永八年）
23　角田浜に石田五郎左衛門、遠藤治部右衛門来り、高祖を迎えて一宿させる。（文永八年十月二十六日）
24の2　四条金吾佐渡に来たり、高祖に誠を尽くす。（文永九年）
25　鎌倉の諸子使いを遣わして高祖のもとを尋ねる。（文永九年四月二十日）
25　富木常忍に書を贈る。（文永九年五月五日）
25　富木殿妻佐渡へ赴き、戒を授けて日妙尼と名づく。（文永九年）
25　熊王常に陪従する。（文永九年）
27　新曽村の妻女難産にて曼荼羅を授与する（妙顕寺）。（文永十一年）
27　関氏妻難産の折、曼荼羅を授与することにより安産し、帰依する。（文永十一年）
27　比企能本、屋敷地をもって道場を建立する（妙本寺）。（文永十一年）
28の2　駿州大宮の由井五郎入道宅（大泉寺）に請じ、曼荼羅を授与する。（文永十一年）
28の2　駿州黒田郷柏坂村の遠藤左衛門、高祖を請じ（一宿）、銭・酒・餅を供養する（本光寺）。（文永十一年）
28の2　上野郷の内房尼宅に一宿する。（文永十一年五月十六日）
28の2　和歌一首を残し、当所を寺とする（本成寺）。（文永十一年五月十七日）
29の2　日野村向井宅に宿す（見法寺）。（文永十一年）
30の2　建治元年の条に慧朝罪を謝し、日伝と改め、身延山に移り庵を結んで奉侍する（志摩坊）。（文永十一年）

（『仏祖統紀』）

31　太田乗明、出家して高祖の弟子となる。（建治元年）

31の2　身延の記を四条氏に示す。（建治元年七月二十一日）（『紀年録』）

32　池上宗仲兄弟の父帰依する。（建治二年）

32の2　四条金吾妻、釈迦小木像を造り高祖に開眼を乞う。（建治三年二月）

32の2　曽谷教信、身延に来りて安否を問う。（建治三年四月）

32の2　四条頼基釈迦像を造りて高祖開眼する。（建治二年七月十五日）

32の2　曽谷直秀、野呂に堂宇を作り、開堂供養をなす。（建治二年）（『紀念録』）

32の2　四条金吾、甲州内船に住み、館を寺とする（内船寺）。（建治三年）

32の2　下山兵庫助光基、因幡房を介して高祖の室に入る（『下山御書』）。（建治三年）

33　江馬入道、四条金吾と法論する。（建治三年）

→この段、註画讃にも見えたるが大同小異あり。

33の2　駿州上野の邑主使いを遣わし、芋二駄を高祖に送る。『こんじょ御書』波木井家に伝わり、現在身延の什物となる。（建治三年）

34の2　相股村史正左衛門病死する。（弘安二年九月）

36　『三大秘書』を太田氏に授与する。（弘安四年四月八日）

38の2→熱原神四郎・田中次郎・広野弥太郎三人の首が刎ねられる。（弘安三年）

→この事（熱原法難）『仏祖統紀』等の正史に見えず。

39　日法、斉藤兼綱に仏像を与え、多古妙光寺の本尊とする。（弘安五年）

39の2　富木常忍家族流行病にかかり、高祖に救いを求める。（弘安五年）

【人物】　駿州富士郡に父重連の旧友、川越に住む夫婦（教化）、工藤吉隆、四条金吾、進士義春、印東氏（檀越）、富木常忍（教化・越年・書状送信）、常忍家（流行病）、工藤吉隆・荏原義宗・池上宗仲・四条金吾頼基・進士太郎義晴（弟子）、法華塚の泉沢氏三人（帰依『仏祖統紀』）、工藤左近丞（『四恩抄』授与）、船守弥三郎・伊東朝高（帰依）、日正、藤原庄屋次郎助（教化）、宇都宮君島某祖母（教化・妙金）、下野守景綱姉（帰依・妙正）、明部少輔行光妻（『法華題目抄』授与）、下総星名五郎（書状送付）、斉藤兼綱（受戒）、塩屋氏（曼荼羅授与）、木立村辺二十八人（曼荼羅授与）、新曽領主黒田時光妻（難産の折曼荼羅授与）、角田浜石田五郎左衛門、遠藤治部右衛門（一宿）、四条金吾（佐渡行・釈迦像開眼・寺院建立）、富木殿妻（佐渡行）、熊王（陪従）、関氏妻（難産の折曼荼羅授与・安産・帰依）、駿州大宮・由井五郎入道（曼荼羅授与）、駿州黒田郷柏坂村の遠藤左衛門（一宿）、上野郷の内房尼（宿泊）、池上宗仲兄弟の父（帰依）、四条金吾妻（仏像開眼）、曽谷教信（身延行）、太田氏（『三大秘法』授与）、日法（仏像授与・斉藤兼綱）、曽谷直秀（寺院建立・野呂）、下山兵庫助光基（入信）、江馬入道（法論・四条金吾）、上野邑主（芋献上）、相股村史正左衛門（病死）、熱原神四郎・田中次郎・広野弥太郎（斬首）

【寺院】下総鼻輪真言寺、鏡忍寺、新曽村妙顕寺、比企谷妙本寺、駿河国大宮大泉寺、駿河国黒田本光寺、多古妙光寺、野呂（妙興寺）、内船寺、本成寺（和歌一首吟詠）、日野村見法寺、多古妙光寺

日蓮と各地での教化の足跡が如実に記されている。内容は、曼荼羅授与・難産祈願・仏像授与といったもので、信

仰を介したつながりが強調されている。

3　日蓮と寺院（庵）に関わる事項

5　海辺に至り壇を設けて八大龍王を勧請し、後五百歳・広宣流布を祈る。（建長三年）
　↓後に中老僧日実、この地に一宇を造る（竜王山妙海寺）。

5↓夫婦一庵を造りて後に妙養寺と号する。（建長三年）

7　茂原領主兼綱並高橋五郎時光、観音の夢想を蒙り、高祖を見る。一七日の説法を請う（藻原妙光寺）。（建長五年）

13　海中出現の像を感得し、その地に一宇を建立する（伊東仏現寺）。（弘長元年）

16の2　上総国夷隅郡興津村の佐久間重吉、法華堂を造り高祖を招く。（文永二年）

16の2　高祖の母堂老衰に及び、卒す（妙蓮寺）。（文永四年八月十五日）

17　↓日胤は千葉氏にて下総古河に帰り一宇を建立する（妙光寺）。

19の1　木立村で大曼荼羅を書し、寺院が建つ（小立妙法寺）。（文永六年）

24　佐渡老松に高祖袈裟を掛け、ここに寺を造る（佐渡実相寺）。（文永九年）

24　天台宗の最蓮坊、甲州下山に住して寺を造る（下山本國寺）。（文永九年）

27　関氏高祖の仏像を造り、後年江戸に寺院を建立する（日暮里善性寺）。（文永十一年）
　この像、後に感応寺から瑞輪寺に安置される。

29の2　八代郡野中の地蔵堂に宿す（定林寺）。（文永十一年）

29の2　西出村に向かう（上行寺）。（文永十一年）

32の2　上州佐久間重貞の子日保とその叔父日家、興津法華堂を守る。（建治二年）

32の2　日家、身延に赴き、誕生寺の号を賜る。（建治二年）

33の2　下総平賀郷鼻和の地蔵堂を曽谷法蓮が法華堂と改め（平賀本土寺）、日朗を開山とする。（建治三年）

34　千日尼、宅を寺となし、日得を開山、日満を二祖となす（佐渡妙宣寺）。（弘安二年）

34　日寂、浅草寺を退き、日増・日可と力を合わせ寺を創る（橋場長昌寺）。（弘安二年）

35の2　筑前阿闍梨日合は、野呂妙興寺を開基し、淡路阿闍梨日賢は雑司ヶ谷法明寺二世となる。（弘安三年）

36　加島（静岡県富士市）の高橋入道、寺を建てる（富士常諦寺）。（弘安四年）

36　日忍、相橋の長福寺、今井の妙福寺の開山となる。（弘安四年）

36　日忍姉の子天目、鎌倉畠中の圓成寺、下野国佐野妙顕寺の開山となる。（弘安四年）

36　蒙古襲来の旗曼荼羅、本所最教寺の宝物となる。（弘安四年）

40　中老僧忍上その室を寺となす（関本弘行寺）。（弘安五年）

40　鶴丸太夫が改宗し、この地が寺となる（要法寺）（弘安五年）

【人物】中老僧日実（妙海寺建立）、茂原領主兼綱並高橋五郎時光（高祖一七日の説法）、南無谷泉沢氏、上総国夷隅郡興津村佐久間重吉（法華堂建立）、高祖の母堂（老衰・逝去）、千葉氏日胤（寺院建立・下総古河）、関氏（高祖仏像造立）、上州佐久間重貞の子日保とその叔父日家（興津法華堂建立）、日家（賜号・誕生寺）、曽谷法蓮（下総平賀郷鼻和法華堂・日朗開山）、千日尼（寺院建立）、日寂（日増・日可・寺院建立）、野呂妙興寺（筑前阿闍梨日合）、加

島高橋入道（常諦寺）、淡路阿闍梨日賢（雑司ヶ谷法明寺二世）、関氏（祖師像造立）、日家（身延登詣）、日忍（相橋長福寺・今井妙福寺開山）、中老僧忍上室（弘行寺）、鶴丸太夫改宗（要法寺）、

【寺院】妙海寺、妙養寺、藻原妙光寺、仏現寺、妙蓮寺、下総国古河妙光寺（千葉氏日胤）、木立妙法寺（大曼荼羅書す）、佐渡実相寺（袈裟掛）、下山本国寺（最蓮坊）、江戸善性寺（関氏仏像造立）、野中寺蔵堂（定林寺）、西出村上行寺、興津法華堂、誕生寺、下総平賀本土寺、佐渡妙宣寺（日得開山、日満二祖）、橋場長昌寺、野呂妙興寺（筑前阿闍梨日合）、加島常諦寺、雑司ヶ谷法明寺、鎌倉畠中圓成寺（天目）、佐野妙顕寺（天目開山）、関本弘行寺、平塚要法寺（鶴丸太夫改宗）、本所最教寺、関本弘行寺

このなかで、海辺に八大龍王勧請、南無谷泉沢氏と法華塚、常諦寺の項目は新出事項と考えられる。日蓮が歩いた地域の信徒教化や寺院の建立に関する事項が多い。

### 4　一般の日蓮伝記に関わる事項

2　百日間虚空蔵の祠に入り、求聞持法を修せられる。（仁治元年）

→この段諸書に見えず、『仏祖統紀』に載せたり（『仏祖統紀』）。

2　大蔵に入りて一代経を閲覧する。（仁治元年）

2　程谷（保土ヶ谷）駅の一旅店に宿し、佛の木像をもって小児の戯具となす。（仁治三年）

2　鎌倉光明寺に入り、良忠に謁見する。（仁治三年）

3　清澄寺にて戒体即身成仏義を著す。（寛元元年）

6　三浦介義澄が孫泰村の弟朝村・光村が謀叛を起こし、一族二百七十余人が自殺する。（宝治元年六月）
7　下総土橋東漸寺の一切経蔵に二回閲覧に行く。（建長五年）
7　高祖阿弥陀堂にて難を避け、上総国笠森観音堂に一宿して妙経を読誦し、且つ歌一首詠じる。（建長五年）
8　壇を設け、伊勢宗廟及び比叡にして三十番神を勧請する。（建長六年）
9　天変地妖、二月二十九日雷電夥しく洪水、六月七日大雨鶴岡社鳴動す。（建長七年）
9　天変地妖、二月二十三日、五月十八日、八月一日、同二十三日、九月四日に大地震動する。（正嘉元年）
9　高祖父の訃報を聞いて倒れ、日昭や周りの人が介抱する。（正嘉二年二月十四日）
9　高祖、房州に至り喪に服し、母を慰め、「一代大意抄」を著し、鎌倉へ帰る。（正嘉二年）
9　鎌倉へ帰る途中、南無谷泉沢氏宅に宿泊する。船に乗ろうとすると逆浪高く、高祖高い場所に行って呪を修すると波がおさまる。（正嘉二年）
10　『災難退治書』を撰す。
12　伊勢浄明寺に至り、三七日間修法する。（弘長元年）
12　高祖恩田に行き、吉田兼益と対面する。（弘長元年）
16の2　常州筑波を過ぎて野州那須に至り、温泉に浴する。（文永二年）
16の2　那須より二里余先に巨石があり、そこに経題を書す。（文永二年）
17　高祖、日朗・日向とともに母の小祥忌を営む。（文永五年）
17　八月二十三日地震あり。（正嘉元年）

18　高祖、十一カ所へ御書を送る。（文永六年）
19の1　高祖甲州に杖を曳き給ふ。（文永六年）
19の1　久本房とともに甲斐国鶴（都留）郡に赴く。（文永六年）
19の1　塩屋家に逗留し、妙経一部を書写し、富士の嶽へ登って山の半腹（経ケ嶽）に納める。（文永六年）
25　『顕仏未来記』を製し給う。（文永十年）
25　十界勧請本尊を図し給う。（文永十年）
27の2　大学三郎法莚を開き、若狭局の冥福を修する。（文永十一年）
28　時宗宗牒を高祖に賜ふ。（文永十一年）
28　宗牒は現在仙台にありて、国宝になる。（文永十一年）
29の2　身延三十一世日脱、遠妙寺の梵鐘銘・序をつくる
29の2　石和川の殺生禁断のこと
31の2　高祖、桜の木の杖をさすと根付く（桜清水）。（『紀念録』）
　↓『仏祖統紀』にはこの歌のこと見えず
32　富木五郎、母を喪い、その骨を身延に納める。（建治二年）
32　蒙古使いが長州室の津に至る。（建治二年四月十五日）
36　大元蒙古賊、筑紫に襲来する。（弘安四年五月）
38　祈祷のため法華経読誦し、仏像を彫刻する（雲払真影）。（弘安四年）

38の2　『本門戒体書』を著す。（弘安四年）

39　『法華初心成仏書』を著す。（弘安五年）

41　高祖筆をとり、譲状を認める。（弘安五年十月三日）

【人物】道元（法談）、江川太郎左衛門大尉吉久（宿泊）、鎌倉光明寺の良忠（謁見）、三浦介義澄・孫泰村の弟朝村・光村（謀反で自殺）、高祖父（訃報）、高祖母（『一代大意抄』述作）、吉田兼益（対面）、塩屋家（逗留）、富木氏母（喪を修む）、南無谷泉沢氏宅（波の祈祷・宿泊）、日朗・日向（母小祥忌）、大学三郎（若狭局冥福回向）、時宗（宗牒送付）、富木五郎（母遺骨・身延山納骨）

【寺院】鎌倉光明寺、清澄寺（『戒体即身成仏義』述作）、泉涌寺（唐書拝読）、東福寺（材木奉納）、上総国笠森観音堂（一宿）、伊勢浄明寺（三七日修法）、下総土橋東漸寺（一切経蔵閲覧）、

【場所】五条の天王寺屋（宿泊）、程谷駅の一旅店（宿泊）、大蔵の一代経（閲覧）、雄山八幡宮（参詣）、下野国那須（温泉浴）、那須近くの巨石（経題書写）、甲斐国鶴（都留）郡行（久本坊）、富士山中腹（妙経一部埋経）、石和川（殺生禁断）、桜清水（杖・桜木）、

道元と法談、東福寺に材木贈呈、といった事項や、日蓮の関西遊学に関して細かくみていくと、未だ不明な点が多い。しかしながら、那須近くの巨石に経題書写、妙経一部の富士山中腹埋経、笠森観音一宿、土橋東漸寺一切経蔵閲覧、といった従来の伝記に加えて詳細な記載がみられるのが特長である。また、29の2は江戸時代の身延久遠寺三十一世日脱の時期の話であり、後世の伝記とされる。その他の事項として、十一カ所へ御書送付、『顕仏未来記』・『初心成仏抄』述作、十界勧請曼荼羅本尊図顕、仏像彫刻、蒙古襲来、天変地妖、といった内容が登場していることが注

目される。

## まとめに—今後の課題—

以上、紹介してきたように、本書の日蓮伝記には次の特長がみられることが明らかとなった。

・従来の日蓮伝記本に挙げられていない寺院・弟子・信徒に関する事項がみられる。

・日蓮滅後の僧侶・信徒に関する事項がみられる。

・注釈によって著者中村経年の調べた内容が挙げられ、伝記に関わる引用に関しては後世の日蓮伝記に一石を投じているといえる。

・伝記引用は、過去に刊行された日蓮伝記本、歴史書、地誌類と多岐に亘っており、著者の伝記作成における情熱を垣間見ることができる。

・『註画讃』（和文）、『仏祖統紀』、『紀年録』といった近世の日蓮伝記本を参考にし、事項を比較検討している。

・各項目は日蓮伝に準拠しているが、個々の項目内には記載順の年代は必ずしも編年体でなく、文意から事項を並べている傾向がみられる。

・幕末期の日蓮伝記本として、刊行時点までに知り得た日蓮伝記に関わる情報を組み込んでいる。

・事項に関しては、出典が明記されていないものがあり、史実とはいえない内容がみられる。

このなかで、従来みられた伝記に加えて、寺院開創、弟子・信徒の教化、法論、著作の執筆といった内容がみられたことが近世の伝記本の特徴であり、日蓮伝記に関わる新たな情報として評価されるところである。しかしながら、

個々の事項は、誇張されている内容が多く、日蓮伝の中で顕彰してみなければならないことと考える。そして、日蓮の足跡における伝承といった事項も多くみられ、これらの事項は民俗学的な方法論によって捉え直さなければならないであろう。さらに、実際の名称が挙げられた寺院や弟子・檀信徒名に関しては、個々に調査研究の上、日蓮教団史上に位置づけていかなければならないと考える。しかしながら、各地域に伝わる日蓮伝承や奇瑞のなかで日蓮と寺院や弟子・信徒のつながりを強調していることが注目され、寺院の開創や弟子・信徒の教化に関しては注目すべき事項も多々ある。つまり、近世の日蓮伝において、日蓮滅後の動向を著者が研究しつつ、新たな事項を示したことが近世の日蓮伝たる所以といえる。ともかく、近世の日蓮伝においては、史実と民間伝承に区別して考えていかなければならず、近世という時代に作成された日蓮伝記本として、その時代背景や著者の作成意図を考えなければならないであろう。

筆者は、現時点において、近代までに刊行されている個々の日蓮伝記本の性格やその内容を詳細に分析していないため、今後は、刊行当時の時代背景や日蓮教団の動向を踏まえ、小川泰堂著『日蓮大士真実伝』を初めとする他の日蓮伝記本と個々の内容を比較検討し、近世後期から明治期に至る日蓮伝記本の特長について考察してみたい。

最後に、本書がなぜ一般に流布されなかったのか。このことを考えてみると、本書の刊行間もなく小川泰堂の日蓮伝記が刊行されたことにもよる。また、本書の内容構成をみると、本文と注釈の二部構成になっているため、日蓮伝記の解説本としての性格が色濃かったためであろう。これにも増して、注釈が長い箇所があり、個々の解釈が伝記本や歴史書との校訂を行っていて、専門的な記述であったことも影響している。よって、日蓮伝記を調べようとする人にはよいが、一般の読者にとっては伝記本として読みにくい内容及び文章構成であったといえよう。

註

（1）『日蓮宗事典』の『高祖年譜』の項目。

（2）冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』（平楽寺書店、一九八三年）

（3）「幕末期日蓮伝記本に関する一考察―中村経年著『日蓮上人一代図会』における挿絵と日蓮の足跡に関わる記載事項を中心に―」（冠賢一先生古稀記念論文集『日蓮教学教団史論集』山喜房仏書林、二〇一〇年、に収録予定）。同論文は、本稿と対をなす論文として位置づけたい。

（4）『日蓮上人一代図会』の書誌、記載内容等については、拙稿（3）紹介論文を参照されたい。